

井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の訂増 様相の研究

著者	金 敬雄
号	2
学位授与番号	18
URL	http://hdl.handle.net/10097/36860

JIN
金

JING
敬

XIONG
雄

学位の種類 博士（国際文化）

学位記番号 国博 第 18 号

学位授与年月日 平成14年 3 月25日

学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当

研究科・専攻 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期 3 年の課程）
国際文化交流論専攻

学位論文題目 井上哲次郎の『訂増英華字典』に於ける訳語の訂増様相の研究

論文審査委員 （主査）

教授 田 中 継 根

教授 青 山 隆 夫

教授 栗 林 均

教授 石 幡 直 樹

助教授 佐 藤 勢紀子

教授 沈 国 威（関西大学）

助教授 丸 山 宏（筑波大学）

論文内容の要旨

第一章 序 論

幕末から明治初期にかけて、いわば蘭学から英学への転換期にあたって、中国で出版された英華辞書類が日本に伝わり、近代訳語の選定、英和辞書類の編纂に活用されてきたことは周知の事実である。その中で、特にロブシャイド（W. Lobscheid）の『英華字典』（1866－1869年）はモリソン（Robert Morrison）以来の英華辞書を集大成したもので、近代訳語の研究で特に注目されている書物の一つである。ロブシャイドの『英華字典』は刊行当初に日本に伝えられ、近代訳語の成立に大きく影響を及ぼしてきたと言われている。日本でロブシャイドの『英華字典』（以下「底本」と称する）を底本にして、明治16～18年井上哲次郎によって『訂増英華字典』（以下「訂増版」と称する）が出版された。そして、明治32年、明治39年の二回にわたって日本で版が重ねられ、また

1903年には上海でも刊行されている。底本について訂増版の序文に「但此書乏坊間而價極貴學者憾其難得」という記述があり、当時ロブシャイドの『英華字典』が高価なため、簡単に手に入れることができなかったことが窺える。また、かつてはロブシャイドの原本が手に入りにくかったことから、井上哲次郎の訂増本ですます研究もあったとの指摘もある。即ち、日本では底本より訂増版が普及し、日本人が底本より訂増版のほうを多く使用したことが推定できる。

ところが、『訂増英華字典』が果たして日本人の手によって訂増されたかどうか疑問視する説がある。一方、『訂増英華字典』そのものが実はロブシャイドの手によるものだとの説もある。しかし、筆者の調べでは、それらの論述には訂増版の実態にそぐわないものが多い。

また、『訂増英華字典』の訂増内容について先行研究は若干あるものの、訂増の全容が解明されたとは思えない。逆に、全体の訂増様相が把握されていない故に、訂増内容にそぐわない論述さえ見られた。

ロブシャイドの『英華字典』の肩代わりの役割を果たしてきた『訂増英華字典』においてどのような訂増が行われ、日本の近代訳語の成立にどのような影響を及ぼしたかを明らかにすることは近代訳語研究の重要な課題の一つである。

『訂増英華字典』の訂増作業が日本人の手によって行われたか否かの問題を含め、字典の性格を解明するには全巻を通じて多角度からの考察が不可欠となる。このような見地から、本論では『訂増英華字典』における訳語の訂増を中心に、全巻にわたって訂増様相を解明することを研究の目的とする。具体的な方法としては、まず研究の基礎作業として、訂増版とその底本とを照らし合わせ、両方を逐一比較し、訂増された内容を網羅するデータベースを作成した。そして、そのデータベースを基に分類作業を行った。本論では、これらの基礎作業の上に立って、各章各節において、訳語の修訂項目を形態と意味の両面から詳細に分類し、訂増の実態を考察し、訂増版の特徴を探ってみた。

第二章 訳語の修訂

本章では、訂増版で底本の訳語を修訂した項目を取り上げ、その実態について考察を行った。

第一節では、「字順の変更による訳語の修訂」について考察した。その結果、全体で22項のうち、2項は底本のミスを訂正したものであり、10項は同義語の入れ替えとなっており、10項は訂増版の修訂ミスであることが確認できた。また、結果的には同義語の入れ替えとなっている10項については、底本には同じ形態のものが複数あるにも関わらず、修訂されているものは一例ずつしかなく、その他はそのまま受け継がれている。また、修訂前の訳語が訂増版で新たに訳語を増補する際、使用されていることも判明した。このような様相から見て、字順の変更は意図的な修訂とはとうてい

考えられず、同義語の入れ替えとなったのは偶然であり、これらも訂増作業の際、何らかのミスによる字順の変更だったという結論に至った。

第二節では、「同義語・類義語の入れ替えによる訳語の修訂」について考察した。この部類では、底本に重複する訳語の一つを他の同義語に修訂することで底本の不備を修正したものが2項あった。一方で、同義語・類義語で入れ替えた結果、訂増版の訳語が重複するに至るなど修訂ミスによるものもあった。さらに、訳語の修訂に一貫性が欠けている側面も確認できた。

第三節では、「符号に関わる訳語の修訂」について考察した。その結果、次のような事実が判明した。コンマ「,」の添削によって、一部の項目では訳語の意味に変化をもたらし、対応する英語と意味上合わないケースもあったが、大半は短文または対句形式の訳語だったので、「,」の添削による訳語の意味伝達にはあまり支障が生じていない。また、符号の修整項目では、訳語と訳語の意味関係または訳語と英語との意味上の対応を明白にするために、一部の符号を修整した傾向が非常に強い。特に注目すべき事例として、英語の見出し語が形容詞の場合、訳語に括弧を付けることで、形容詞の形態にしたものが2項あった。本節の考察を通して、先行研究で訳語の脱落として取り上げている項目のうちの4項は、符号に関わる訳語の修訂であり、訳語の脱落ではないことが明らかになった。

第四節では、「訳語の修訂ミス」について考察した。この考察を通して、訳語の修訂ミスの要因は字体の類似性と発音の類似性であることがわかった。さらに、訳語の修訂ミスには日本語の干渉と思われるものが3項あった。

第五節では、「訳語の訂正」について考察した。その結果、底本にはロブシャイドの『英華字典』で独自に創作したと思われる文字が多いことが判明した。そして、それらは正確な文字に酷似している特徴をもっていた。また、この部分にも日本語の干渉と思われるものが1項あった。

第六節では、「訳語の修整」について考察した。ここでは、第一節～第五節に含めることができなかった項目を一括して取り上げた。この部分の訳語の修訂は、修訂前と修訂後の訳語と英語との意味上の対応に変化が生じていないという特徴を持っている。そのうち、修訂前と修訂後の訳語が共に英語と意味上の対応を成していない項目は19項あった。これらも訳語の修訂ミスと見なすべきである。また、この部分には、英語の見出し語が形容詞の場合、訳語を「～的(慨)」の形態に修整したものは5項あった。これは訂増版で品詞を重視した事例として注目すべきものである。

第三章 訳語の新設

底本では訳語が付いていなかった英語に、訂増版で初めて訳語を付けたものがある。本論ではそれらを「訳語の新設」と称している。本章ではそれらを取り上げ、その実態を考察した。全巻を通

じて、この種類のものは35項しかなく、他の種類の改訂と比較すると非常に少ない部類に属する。訳語の新設のうち、4項は底本で英語の短文を提示するのみで、訳語が付いていないという不備を訂増版で修正するものであった。また、訳語の新設のうち、7項は底本において参照項目があったもので、新設された訳語のほとんどは参照項目のものと完全に一致するか類似していた。即ち、訂増版で訳語を付ける際、底本で提示した参照項目の訳語を大いに参考にしたことになる。

第四章 訳語の増補

訂増版で訳語が増補された項目は6206項ある。これら6206項を英語に即して見ると、その内訳は次のようになっている。親見出しに増補したものは2172項で、子見出しに増補したものは4023項で、その他のものは11項である。さらに、親見出し2172項のうち、底本の親見出しを訂増版でそのまま受け継いだ上で、訳語を増補したものは2108項で、底本の親見出しに訂増版で何らかの改訂を加えた上で、訳語を増補したものは64項ある。子見出し4023項のうち、底本の子見出しを訂増版でその

表1 増補訳語の内訳

訳語の増補	親見出し	英 語 共 通	2108	2172	6206
		英 語 改 訂	64		
	子見出し	英 語 共 通	3620	4023	
		英 語 改 訂	403		
	そ の 他	子見出しの削除	5	11	
		親見出しから子見出しへの改訂	2		
		子見出しから親見出しへの改訂	4		

まま受け継いだ上で、訳語を増補したものは3620項で、底本の子見出しに訂増版で何らかの改訂を加えた上で、訳語を増補したものは403項ある。そして、その他に分類されている11項のうち、5項は底本の子見出しの英語が訂増版で削除され、訳語が子見出しとの対応から親見出しとの対応に変わったもの、2項は底本の親見出しが訂増版で子見出しに改訂されたもの、4項は底本の子見出しが訂増版で親見出しに改訂されたものである。これらを一覧表にすると「表1」のようになる。

次に、訳語に即して見ると、大半は既存の訳語と類義関係のものであり、ごく少数の項目において、底本の訳語では提示されていない意味を増補したため、増補された訳語と既存の訳語が類義関係になっていない。また、子見出しの英語に対応していた訳語の場合、底本と訂増版の訳語が必ず

しも共に子見出しとの対応ではなく、一方が親見出しに対応しているため、訳語同士が類義関係になっていないものもある。しかし、これらは子見出しか親見出しのどちらかと意味上の対応を成しているもので、特に問題視する必要はないと思われる。このように、訳語の増補においては、親見出しまたは子見出しの意味と対応する訳語を増補したものが訳語増補の主流となっている。しかし、相対的に数は少ないものの、訳語増補全般にさらに以下のような例が見られた。

- ① 底本より具体性のある訳語を増補している例
- ② 増補訳語にミスがある例
- ③ 訳語を増補した結果、重複となった例
- ④ 他の項目で削減された訳語を移動した例
- ⑤ 英語の削除及び脱落による訳語の増補の例
- ⑥ 増補訳語を底本の補遺から採用した例
- ⑦ 底本の脚注に関わる訳語の増補の例
- ⑧ 増補訳語が「～的（嘸）」の形態を取っている例

第五章 訳語の削減

訂増版では、底本にあった訳語を英語との本来の対応から一部または全部削除したものがある。本章では、それらを「訳語の重複」、「訳語の削除」、「訳語の移動」の三つに分類して考察した。全体で訳語の削減は66項ある。そのうち、訳語が重複していたため削減されたものは18項、訳語が削除されたものは15項、何らかの理由で移動されたものは33項あった。計66項のうち、訳語が脱落したと思われるものは9項のみだった。その他の57項はそれぞれ具体的な理由で削減されたことがわかった。特に、品詞の角度から訳語と英語の対応関係を考慮し、一部の訳語を削減し、適切なところに移動したものは7項あった。

第六章 英語の修訂に伴う訳語の修訂

訂増版において、英語の修訂と訳語の修訂は数多くある。本章では、そのうち英語の修訂と訳語の修訂が直接関連しているものを取り上げ、その実態を考察した。この部類の修訂は全巻を通じて11項しか確認できなかった。訂増版において、全体の訂増箇所は2万にのぼる。そのうち、底本の英語に対して、何らかの修訂を加えたものは4981項あり、訳語の修訂は657項（異体字の入れ替えは含まれていない）ある。ところが、英語と訳語の修訂が意味上直接関連しているものは11項にすぎないことがわかった。即ち、訂増版では英語と訳語の修訂が数多くあるものの、多くの項目にお

いて互いに影響することがなかったと言える。

第七章 英語の増設に伴う訳語の増設

訂増版で増設された英語の項目は全巻を通じて2927項あった。英語の角度からその様相を考察すると、「親見出しの増設」は744項で、「子見出しの増設」は2183項である。訂増版で新たに増設した親見出し744項のうち、何らかの形で訳語を付けているものは489項で、親見出しに直接訳語を付けていないものは255項となっている。そして、直接訳語が付いていない255項のうち、221項には子見出しとその訳語が付いており、残りの34項には単に英語で参照項目を提示しているのみであ

表2 英語の増設様相

英語の増設様相	親見出し	訳語が付いているもの	489			744	2927
		訳語が付いていないもの	子見出しと訳語	221	255		
			参照項目	34			
	子見出し	訳語が付いているもの	2171			2183	
		訳語が付いていないもの	参照項目	12			

表3 訳語の増設様相

訳語の増設様相	訳語が付いている親見出しまたは子見出し	増設された訳語	親見出し	478	2186	2660	2927	
			子見出し	1708				
		一部または全部が底本の訳語	訳語の削減	20	474			
			英語の削除・脱落	6				
			補遺の訳語	50				
			訳語の増補	33				
			訳語全部が底本のもの	365				
		訳語が直接付いていない親見出し	221					
	親見出しに参照項目	46						

る。また、訂増版で新たに増設した子見出し2183項のうち、何らかの形で訳語を付けているものは2171項で、訳語が付いていないものは12項あった。これら訳語が付いていない12項は英語で参照項目を提示しているものである。上の「親見出しの部分」で取り上げた34項の参照項目はいずれも訂増版で増設した親見出しに訳語または子見出しの英語を付けず、参照項目を提示するのみだったのに対して、ここで言う12項は底本にすでにあった親見出しに訂増版で新たに参照項目を付けたものである。そして、この12項の親見出しにはいずれも底本で訳語または子見出しの英語とそれに対応する訳語が付いていた。

訂増版で増設した英語の訳語の有無による分類を一覧表にすると「表2」のようになる。また、訂増版で増設された英語の項目を訳語の角度から、その内訳を一覧表にすると、「表3」のようになる。「表3」から、訂増版で増設した英語に使用されている訳語のうち、474項は底本の訳語を採用していることがわかる。

第八章 英語の削除に伴う訳語の改訂

底本にあった英語の項目を訂増版で削除している場合がある。それに伴って、対応していた訳語が英語と共に削除されるか別の項目に移動されている。本章ではそれらを「英語と訳語の削除」、「英語の脱落」、「訳語の移動」、「子見出しから親見出しへの訳語の移動」の四つに分類して考察した。このうち、「英語の脱落」は11項あるが、いずれも子見出しの英語が単語か短い表現となっており、底本にある訳語の発音表記と混同されて、見落とされたものと思われる。計83項のうち、17項は訂増版の修訂ミスによるもので、その他の66項はそれぞれ具体的な理由のもとで削除されたことが判明した。

第九章 改編様相

本章では、訂増版で底本の内容について、配列変更、項目の移動、項目の併合など編纂を行ったものを取り上げ、その実態を考察した。

第一節 親見出しの配列変更

計88項のうち、62項は底本でアルファベット順になっていなかったものを訂増版で訂正したものである。一方で、底本では適切な配列だったものが、訂増版の改訂によってアルファベット順にならなくなったものは6項あった。また、同じ形態の親見出しの配列変更と英語にハイフン「-」の付いている親見出しの配列変更には明確な基準が見あたらない項目は19項あった。残り1項は底本・

訂増版ともにアルファベット順になっていない。

第二節 親見出しから子見出しへの改訂

全体から見て、底本の親見出しが短文形式になっており、親見出しとしての体裁になっていないものが多かった。訂増版ではそれらの子見出しのほうに回した上で、親見出しを一語に整理している。また、訂増版では複数形の親見出しを避ける傾向が見られる。

第三節 親見出しの併合

訂増版で親見出しが併合されたものは全巻を通じて29項ある。その要因として2点を挙げることができる。一つは、底本でアルファベット順になっていないなど不備があったため、訂増版でそれを訂正したことである。もう一つは、訳語から見て区別する必要がなかったことである。この改訂によって、親見出しが29項の減少となった。

第四節 子見出しから親見出しへの改訂

これは全体で55項あるが、詳細に分類すると16種類に分けることができる。この改訂によって、訂増版で親見出しが29項の増加となった。

第五節 子見出しの併合

全体で18項のうち、15項は底本に同じ子見出しの英語が二つあったものを訂増版で併合したもので、底本の不備を修正した意味も持っている。また、他の3項は同一の子見出しではないものの、英語の表している意味は類似している。

第六節 子見出しの移動

全体で206項あるが、この改訂の理由として次の4点が考えられる。

- ① 親見出しと訳語の品詞対応を考慮したこと
- ② 英語の例文を直接関連のある親見出しに移動したこと
- ③ 子見出し及び訳語同士の意味関係を考慮したこと
- ④ 底本の親見出しを削除したため、そこにあった項目を移動させたこと

第七節 子見出しの配列変更

全体で24項あるが、訳語の使用頻度が高いと思われるものを前のほうに移動する傾向が強かった。また、意味の類似した項目を同じ場所に集中させる例もあった。さらに、広東語を後に回し、北京官話を前に移動させているものが1項目あった。訂増版で北京官話をより重視した事例として注目すべきである。

第八節 訳語の配列変更

全体で17項あるが、訂増版で訳語の配列を変更した理由として次の3点が考えられる。

- ① 使用頻度の高い訳語を前に移動した。

- ② 字数の少ない訳語を前に配置した。
- ③ 注釈を訳語の前から訳語の後に移動した。

第九節 異体字の入れ替え

訂増版では底本の訳語を異体字で入れ替えた項目が数多くあり、異なり数で60字にのぼる。しかし、訳語の意味には何の影響も及ぼさないもので、それら全般を問題視する必要はない。本節では、異体字の入れ替えの中から、訂増版の訂増様相を示している「沉、沈」、「鬥、鬪」の2組を取り上げ、その様相を考察した。

訂増版では異体字の入れ替えにおいて、それぞれ一定の方向性を持っている。しかし、一方で改訂の方針で一貫性が欠けていた。そして、それら改訂されていないものが字典の後半に集中している特徴がある。また、「沉」から「沈」への改訂において日本語の影響が見られることは注目すべき点である。

第十章 訂増に使用された広東語

底本では訳語に広東語と北京官話の両方の発音表記を付けており、広東語も重視したことが窺える。しかし、広東語と北京官話には共通する語彙が多く、明確に区分することはきわめて困難である。広東語で使用されるが、北京官話ではほとんど使用されない文字または表現を基準にして考えた場合、訂増版の訂増内容に関わっている広東語は105項にすぎない。本章では、その実態を考察した。その結果、訂増版で補充した広東語は73項で、そのうち72項は底本にも多く見られる「佢、唔、係、仔、嘅、咁、吓、冇、嘅、乜」などに関わるものであり、1項のみが底本に見られない表現であった。即ち、訂増版で新たに補充した広東語独特の表現はきわめて少ないことが判明した。

第十一章 結 論

第二章から第十章にかけての考察を通して、訂増版の訂増作業が決して先行研究に指摘されているような単純な作業ではなく、その作業は多岐にわたり、かなり綿密に行われたことが確認できた。これら一連の考察を通して、先行研究に訂増内容にそぐわない部分または不備な面があることが明らかになった。第二章から第八章にかけて取り上げた訳語の訂増項目の内訳を一覧表にすると、「表4」のようになる。「表4」のうち、「訳語の増補」、「英語の増設に伴う訳語の増設」には、底本の他の項目にあった訳語を移動したり、底本の補遺の内容を採用したりしたものも全部含めてある。

表 4 訂増訳語の分類

訳語の訂増	英語の訂増に関わらない訳語の訂増	訳語の修訂	字順の変更	22	646	9707
			同義語・類義語の入れ替え	77		
			符号に関わる修訂	139		
			修訂ミス	210		
			訂正	160		
			修整	38		
	訳語の新設	35				
	訳語の増補	6206				
	訳語の削減	66				
	英語の訂増に伴う訳語の訂増	英語の修訂に伴う訳語の修訂	11			
		英語の増設に伴う訳語の増設	2660			
		英語の削除に伴う訳語の削減	83			

訂増版における訳語の訂増に関わる9707項のA～Zの部における分布状況は「表5」の通りである。

表 5 訂増訳語分布表

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	
1504	1104	1410	725	487	410	260	313	369	53	30	251	342	
N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	合計
100	134	646	30	379	705	168	90	88	90	1	8	10	9707

修訂項目全体のうち、底本の四冊本の第一冊目（A～C）に当たる部分に全体の41％が集中している。また、第一、二冊（A～H）が占める率は64％になり、訂増版の訳語の訂増は前半に多く集中している。具体的な訂増項目において、特に「A、B、C」の部に集中している傾向が多かった。一方、後半に来て、訂増の一貫性が欠けてしまう様相があり、訂増作業が後半になって、若干おろそかになっていたことが窺える。

また、第九章で考察したような改編によって、訂増版は底本と比べて辞書としての体裁が大きく改善されている。

全体の訂増様相から見て、訂増版は「品詞重視」、「底本内容の尊重」、「訳語の補充」、「北京官話の重視」という四つの基本方針のもとで、全体の訂増作業が行われたことが推定できる。

訂増版の訂増訳語が日本語と深く関わっている事例は所々にあった。「無難」、「決意」などは古典中国語で使用された言葉であるが、現代中国語では使用されていない。しかし、これらの言葉は訂増版で増補訳語として採用されており、現代日本語にも定着している。また、訳語の修訂において、訂増版で「150」を「百五十」と表現している例がある。これは日本語としては問題ないが、中国語の表現としては不自然な形となっている。中国語では、百の前に数字「一」を付けるのが一般的である。また、異体字を入れ替えた項目の中に「沉」から「沈」に修訂したものは116項もあった。現代日本語では訂増版の「沈」が一般的に使用されているのに対して、現代中国語では人名、地名以外はほとんど底本の「沉」が使用されている。さらに、訂増訳語のミスにおいては、修訂前と修訂後の訳語の文字を中国語の角度から見た場合、字体と発音の類似性はないが、日本語読みすると一致するものがあった。これらは、訂増の過程で日本語の干渉が働いていたことを物語っていると言えよう。この研究を通して、先行研究で『訂増英華字典』の編者について疑問視する論述の中に、訂増版の実態にそぐわないものが多いことが明らかになった。筆者は訂増版の実態から見て『訂増英華字典』の編者は日本人であったことは間違いないと考える。

訂増版における訳語の修訂、増補、増設項目の中に、訳語のミスが多くあった。それらを正確なものと比較してみると、多くの項目において、字体または発音の類似性があることがわかった。字体の類似性は、形声文字の場合、発音を示す部分か意味を示す部分が同じなので、結果的には発音または意味の類似性をもたらしている。漢字のこの特徴に基づいて訳語のミスを考えた場合、字体の類似性が訳語の訂増ミスを引き起こした主な原因であると考えられる。

字体と発音の類似性が編集過程での訂増ミスをもたらした可能性を完全に否定することはできないが、このようなミスはむしろ製版する過程で起こった可能性がより大きいと思われる。このように考えると、訳語の修訂項目のうち、結果的には同義語・類義語の入れ替えとなっているものが多いが、訳語を意図的に修訂する必要性は見いだせない。したがって、それらも製版過程で字体または発音の類似性によって起こったミスが結果的に同義語・類義語の入れ替えとなったと考えられる。

訂増版の改訂によって、親見出し数にも変動が生じている。「親見出しの削除」、「親見出しから子見出しへの改訂」、「親見出しの併合」によって、58項の親見出しが減少している。一方、「親見出しの増設」、「親見出しの新設」、「子見出しから親見出しへの改訂」によって、773項の親見出しが増加している。これを差し引いた結果、訂増版で715項の親見出しの純増となっている。筆者の調べでは底本の親見出し数は計44962項である。したがって、訂増版の親見出し数は45677項となるはずである。

本論は『訂増英華字典』研究の一つのステップである。本論で解明された訂増訳語の実態、とり

わけ訳語の増補、増設、新設などは、どの先行辞書に典拠を持つか究明する必要がある。この作業を通して、はじめて『訂増英華字典』独自の訳語の有無の確認が可能となる。

本研究を通じて、『訂増英華字典』の訂増訳語は底本の訳語に比べて現代中国語、現代日本語と一致するものが多いことも確認できた。日本において、明治21年ごろから、訳語はようやく英華辞書から脱して、日本人独自の訳が試みられ、現代訳語に非常に近づいてくるとされている。『訂増英華字典』が明治16～18年に出版された後、明治32年、明治39年の二回にわたり再版され、さらに1903年に上海でも刊行されたということは、まさにその時期に活用されてきたことになる。『訂増英華字典』が近代訳語の成立においてどのような役割を果たしたかを究明するために、訂増版で新たに補充された訳語全般が後続辞書とどのような関わりを持っているかを探ることも今後の重要な研究課題である。

本研究の基礎作業として作成したデータベースは、英語と訳語の訂増内容全般を網羅したものである。従来の手作業によるカード式と違って、膨大な訂増内容をさまざまな角度から瞬時に検索、抽出することができるようになっており、今後『訂増英華字典』に関わる研究で広く活用できるものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、井上哲次郎の『訂増英華字典』（明治16～18年）における訂増様相についての研究である。本字典はロブシャイドの『英華字典』（1866～1869年）に大幅な訂増を施したものであり、日本の近代訳語の成立において非常に大きな役割を果たしたものと考えられてきた。しかしその役割を解明するためには、まず、その訂増様相についての十分な研究が必要であるが、現段階では、わずかの、内容的にも満足の行かない研究があるに過ぎない。本論文は、まず、約2万に及ぶ訂増箇所の内容をすべて入力したデータベースを作成するという基礎作業を行い、その基礎の上に、形態と意味の両面から訂増の様相、特に、訳語の訂増様相の全貌を解明しようとした画期的な論文である。

研究の結果、主として次のことが明らかになった。①訂増作業が、決して先行研究で指摘されているような単純な作業ではなく、綿密に多岐にわたって行われたものであること。②「品詞の重視」、「底本内容の尊重」、「訳語の補充」、「北京官話の重視」という四つの基本方針のもとに行われた作業であること。③現代日本語及び現代中国語との相当の関わりが見られること。④訂増版が日本人の手になるものであることを否定的に見る学説が出されているが、それが訂増版の実態にそぐわないものであること。

これらはすべて訂増様相の全貌を明らかにすることによってはじめて発見されたことであり、本論文の持つ大変大きな意義と言わねばならない。しかし、筆者自身も指摘しているように、本論文は『訂増英華字典』を本格的に研究する上での一つのステップでもある。すなわち、約9,000語の増補・増設された訳語がどのような先行辞書に典拠を持つのか、そして、後続辞書とどのような関わりを持つのかを明らかにすることにより、本字典が日本の近代訳語の成立において果たした役割を解明することが筆者の今後の大きなテーマである。その意味で、今回作成したデータベースは、膨大な訂増内容を様々な角度から瞬時に検索・抽出することが可能であり、上記のテーマを追求する上で極めて大きな力を発揮するものと期待される。

訂増内容の分類基準にやや煩雑な点があること、本字典についての書誌的な考察が不足していることなど、改善の余地が多少あるが、今後の課題としたい。また、データベースの作成法や使用法が明らかにされていないが、本論文の研究方法は類似した研究にとっての一つの規範ともなりうるものと考えられるので、早い機会に公表されることを期待する。同様に、増補、増設された訳語の公表も、近代訳語の成立の研究において計り知れない意義を有すると考えられる。

以上のことから明らかなように、本論文は、筆者が自立して研究活動を行うに必要な高度の研究能力と学識を有することを示している。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。